

現代ロシア文学と麻薬¹

岩本 和久

ロシアでは特にソ連崩壊後、麻薬の汚染が進んでいる。ロシア保健省の公式の統計では、2001年の時点で45万1000人の麻薬患者がロシア国内にいるということになっているようだが、300万人以上にのぼるといふ説もあるようだ。また、大学生の30パーセントが麻薬の経験を持つという調査結果も、やはり保健省のものとして存在しているらしい。

このような事態は文化領域にも影響をもたらしている。

麻薬という単語を聞いてロック・ミュージックを連想するというのはかなり陳腐な発想にも思えるが、ロシアの場合にあっても、麻薬の表象はサブカルチャーの領域、たとえばロックの周辺に観察することができる。1980年代には既に、「キノー」という伝説的なバンドのヴォーカルだったヴィクトル・ツォイが、日本でも公開された映画『僕の無事を祈ってくれ』の中で、麻薬と戦っていた。麻薬中毒になってしまった恋人を救おうとする主人公が、麻薬を横流ししている医師と対決するという内容の映画だ。ペレストロイカ期のカザフスタンで製作されたこの映画から私たちは、80年代に既に麻薬が深刻な社会問題となっていたことを知ることができる。

ロックの世界には、それがロシアの場合であっても、麻薬文化との親近性をうかがわせる様々な単語の使用を見出すことができる。「アガタ・クリスティー」というバンドには『オピウム』というタイトルのアルバムが存在する。また、「チャイフ」というバンドがあるが、このバンドの名前「チャイフ」は「チャイ」（つまり、お茶）と「カイク」（これは麻薬などによるエクスタシーを意味する単語）を合わせた、ユーモラスなものだ。あるいは、「スムイスロヴィエ・ガリュツィナーツィイ」というバンドもあるが、ここにも「ガリュツィナーツィヤ」（つまり「幻覚」）への言及を見ることができる。

近年はロシアの文学の領域、中でも小説の世界において、麻薬への関心が目に付くようになった。

近代小説というものはそもそも下層の生活を、あるいは精神的・肉体的に病んでいる者の生活を描こうとするものだから、そこに麻薬というものが登場するというのも決して不思議なことではない。ド・クインシーやバローズといった名前を挙げるまでもなく、近現代の欧米文学では、しばしば麻薬が扱われている。とはいえ、現代のロシア小説における麻薬の扱われ方には、それら欧米の文学と共通する性質だけでなく、現代ロシアに特有の

¹ 本稿はロシア・東欧学会 2004 年度大会（2004 年 10 月 9 日、北海道大学）での報告「現代ロシア文学と麻薬」にもとづくものである。

性質を見出すことができるように思われる。

最初に取り上げてみたいのは、現代ロシアを代表する作家ソローキンの『ドストエフスキイ・トリップ』だ。

ヴラジーミル・ソローキンは1955年生まれ。美術や文学の領域の運動である「コンセプチュアリズム」を代表する作家で、主人公が登場人物全てを殺害してしまう『ロマン』や、古典作家のクローン人間に蓄積される脂肪をめぐるスターリンとヒトラーの争いを描いた『青い脂肪』というようなスキャンダラスな作品で知られている。最近の作品には『氷』、『プロの道』という連作長編がある。

『ドストエフスキイ・トリップ』は1997年に刊行された。モスクワのユーゴ・ザーパド劇場は、ヴェリヤコーヴィチの演出でこの作品を1999年より上演している。上演時間は1時間45分なので、ロシアの演劇としてはきわめて短いものと言える。麻薬を吸うために集まった人々の語りだけで構成されたこの戯曲は、上演するためのものではなく、むしろ読むためのテキストにも思えるのだが、私見ではユーゴ・ザーパドの舞台もこの印象を覆すことには成功していない。

この戯曲には、古典文学の幻覚を体験できる麻薬が登場する。薬を飲むと、様々な古典文学の登場人物になったような幻覚に襲われるのだ。戯曲の登場人物たちはドストエフスキイ用の薬を飲んで、『白痴』の登場人物たちに変容する。しかし、『白痴』の登場人物になりきっていた彼らは、やがて、巨万の富を得たり、世界を焼き尽くしたりといった誇大妄想を語り出す。その後、誇大妄想の至福感は失われ、意気消沈した彼らは、性的な体験やカニバリズムといった幼年期のトラウマを語りながら、死んでいく。ドストエフスキイという麻薬は非常に危険なものだったというのが、戯曲の結論だ。

邦訳されたソローキンの短編集『愛』には、「麻薬としての文学」というタイトルのインタビューが収録されている。「文学とは麻薬である」とは文学というものが、近代ロシアで伝統的に考えられてきたような倫理的なものではなく、もっと病的で個人的なものである、という主張なのだが、この『ドストエフスキイ・トリップ』は、「文学は麻薬である」というテーゼを具体的なイメージと共に上演したものと言えるだろう。麻薬中毒者の生活を描いたものというよりは、麻薬の比喻で文学作品を問い直したものと考えべきものなのだ。それはマニフェスト的な作品とも、あるいは古典のパロディー化、文学作品との戯れとも考えられる。

とはいえ、そこには文学テキストと触れ合うことによって、つまり読書という経験を通じて、作者の、あるいは読者の、無意識に抑圧されている欲望やトラウマが顕在化されることになる、という精神分析的な文学理解を読み取ることもできるはずだ。「文学とは紙の上の文字でしかない」というようなポストモダン的な主張を行うソローキンだが、その一

方で彼の発言は、しばしば精神分析を連想させる。たとえば亀山郁夫はそのソローキン論の中で、「作家たちはみずからの『心身症的、文学的ロシア』をどう作り出すかは分かっている、現実のロシアをどうするかなどなにひとつ分かっていません」といった発言を引用している。²

ペレーヴィンの小説『ジェネレーション P』も麻薬と無縁ではない。

1962 年生まれの作家ペレーヴィンは、現代ロシアではもっとも人気の高い作家の 1 人と言えるだろう。映画やテレビドラマ、CM、コンピューター・ゲームといった大衆文化が流通させる様々なイメージを積極的に取り入れながら、幻想的な空間を作り出すというのが、彼の作品の特徴だ。

当初、短編や中編を執筆していた彼は、1996 年の『チャパーエフとプストタ』以降、長編小説を発表するようになった。これは革命後の国内戦を現代ロシアに重ねた作品だが、その後、1999 年の『ジェネレーション P』ではメディアに操作されるエリツィン時代のロシア、2003 年の『DPP (NN)』、2004 年の『妖怪の聖なる書』では国家権力と実業家の関係が緊張したプーチン時代のロシアと、現代ロシア社会を念頭に置いた作品を発表し続けている。

『ジェネレーション P』の主人公ヴァヴィレン・タタルスキイは大学時代の友人のついでで広告会社に就職し、コピーライターになる。謎めいた広告業界で働くようになった彼は別の友人から「ベニテングダケ」を入手し、それによる恍惚感の中でチェ・ゲバラの肖像の付いたキューバの 3 ペソ硬貨を発見する。彼はやがて降霊術の板（これは「こっくりさん」のようなものだ）を入手し、チェ・ゲバラの霊から消費社会の欲望についての解説を受ける。また、街で LSD を入手すると、それによるトリップ状態の中で古代バビロンの龍シルフと出会い、消費社会に暮らす人間を焼く炎についての説明を受ける。やがて、彼はテレビの世界に登場する政治家や政商たちがヴァーチャル・リアリティに過ぎないこと、世界を支配しているのは広告業界であり、その支配者は古代バビロンのイシュタル神の夫であることを知る。小説の最後でヴァヴィレンは、イシュタル神の新しい夫となり、その 3D モデルがテレビに登場することになる。

ペレーヴィンはその多くの作品で、現実の背後にあるもう 1 つの現実、幻想的な別世界を描き出そうとしている。そのような二世界性、複数の世界が存在するという状態は、ロマン主義以降の幻想文学にしばしば登場するものだが、『ジェネレーション P』の場合、麻薬はこの別世界を知るための手段として登場している。

² <http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/literature/sorokin-1.html>

このような麻薬の使用法には、たとえばカルロス・カスタネダの影響を指摘できるかもしれない。ペレーヴィンの作品にカスタネダに対する関心が見て取れることは、批評家ミハイル・ルイクリンも指摘している。³ 自らが創作したテキストを文化人類学者として発表したカスタネダだが、その著作はドゥルーズ＝ガタリ、見田宗介、中沢新一、今福龍太ら多くの学者に注目され、あるいはオウム真理教のような新宗教にも影響を与えた。ルイクリンが名前を挙げているように、カスタネダはロシアにおいても知られており、たとえば、1992年には5巻本選集が刊行されている。

カスタネダが語ったのは、ネイティブ・アメリカンの老師から「ペヨーテ」など幻覚を起こす植物を与えられながら、現実の背後の世界を体験すると共に、ネイティブ・アメリカンの世界観を学ぶという物語だ。『ジェネレーション P』における麻薬の使用だが、それが別世界を知るための手段になっているという点はもちろん、「ベニテングダケ」という植物への関心、あるいはバビロンという古代社会への関心と結びついているという点においても、カスタネダとの共通性を指摘できるだろう。

現代ロシア文学には、カスタネダとの親近性を感じさせる小説は他にも存在している。たとえば、パーヴェル・ペッペルシテインとセルゲイ・アヌフリエフによる『カーストの神話生成的愛』だ。この1000ページに及ぶ長大な小説は第1巻が1999年に、第2巻が2002年に刊行されている。

ペッペルシテインとアヌフリエフは美術のジャンルで活躍しているアーティストだが、散文や詩といった文字テキストも執筆している。ペッペルシテインは1966年生まれで、両親はコンセプチュアリズムのアーティスト、ヴィクトル・ピヴォヴァーロフとイリーナ・ピヴォヴァーロヴァだ。アヌフリエフは1964年に、オデッサで生まれている。2人は他の数人の芸術家と共に「医療解釈学」という名のグループを作って、活動している。

『カーストの神話生成的愛』は第2次世界大戦を、幻想的なイメージの中で描いた小説だ。主人公の党オルグ、ドゥナーエフはドイツ軍の侵攻中、1人森の中に残されてしまう。彼は森の中に現れた僧侶たちによって頭の中に「雪娘」を埋め込まれ、また謎めいた陸軍中尉のもとで飛行を習得する。その後、ドゥナーエフは太陽公ヴラジーミルやパン、吸血鬼などに変容し、ソ連各地やヨーロッパを旅しながら、ソ連軍を支援する。その前にはナチスの制服姿のカールソン（これはリンドグレーンの物語の主人公だ）が立ちはだかる。最終的にソ連軍は勝利し、ドゥナーエフはクレムリンの「無名戦士の火」に変容する。

『カーストの神話生成的愛』では、第2次世界大戦の展開にそったこの幻想的な物語の前後に枠となる部分（プロローグとエピローグ）が付けられている。この枠の中で、現実

³ Рыклин М. Время диагноза. М.: Логос, 2003. С.83.

の世界のドゥナーエフは、1990年代までソ連で生活を続けている。つまり、幻想的な第2次世界大戦の部分は、森の中で瀕死の状態に陥ったドゥナーエフが見た夢とも考えられるものなのだ。そして、森に入ったドゥナーエフが、奇妙なキノコを食べて幻覚に襲われるという記述から私たちは、第2次世界大戦をめぐる幻覚のような記述の全てがこのキノコによるものなのではないか、という推測に導かれる。また、エピローグには現代ロシアに暮らすドゥナーエフの孫娘が登場するが、彼女はモスクワのクラブで夜遊びをしながら、LSDを摂取している。

『ジェネレーション P』と同様、『カーストの神話生成的愛』の幻覚も、古代的・伝統的な性格を帯びている。バビロンに関心を示した『ジェネレーション P』の場合とは違い、『カーストの神話生成的愛』では、伝統性はロシアの森、あるいは「雪娘」や「グーシ・レーベジ」といったロシア民話として現れている。とはいえ、西に向かうドゥナーエフの幻想的な旅が、「西への旅」（つまり『西遊記』のロシア語題）と呼ばれているように、そこには東洋的な要素を指摘することもできる。

以上の3つの小説は、麻薬そのものを主題としたものではない。そこでは麻薬はむしろ、文学や国家といった主題を芸術的な形で展開するための契機として用いられている。とはいえ、麻薬そのものを主題とした作品が、現代ロシアに存在していないわけではない。バヤン・シリャーノフによる『最も低い飛行』はそのような作品だ。

バヤン・シリャーノフは1964年生まれの作家で、本名はキリル・ヴォロビョーフという（シリャーノフの名を用いるようになる前は、キリル・ヴォロビョーフの名前で犯罪小説を発表していたようだ）。ペンネームのバヤン・シリャーノフだが、「バヤン」は隠語で「注射器」を、「シリャーナ」は注射器を製造している「ヒラナ」社を、「シリャーチ」は「麻薬の静脈注射」を意味している。隅から隅まで麻薬を連想させる名前と言えらるだろう。

シリャーノフの名によるテキスト『最も低い飛行』は、スキャンダルの原因となってきた。この小説は2000年に出版されると同時に、モスクワの大書店「ビブリオ・グロブス」での販売を拒絶された。また、ソローキンの『青い脂肪』と共に「共に歩む者たち」から告発され、ポルノ流布罪で起訴されることになった。

『最も低い飛行』は、エフェドリン（これは葛根湯などの風邪薬にも用いられているマオウのことだ）を乱用する人々を描いたエピソードを集めた作品だ。登場人物たちにはナヴォトノ・ストエチコやシャントル・チェルヴィツといった、奇妙な名前が付けられている。彼らの生活は麻薬と性、そして何よりも性的な、あるいは暴力的な夢に彩られている。語り手はそれらの要素を、隠語を交えながら、アネクドートのように描写していく。麻薬に溺れる人々は現実の性交渉よりはグロテスクな夢の中に性的な快楽を見出す。と同時に、彼らはレイプされる女性や、麻薬に溺れる子供というような、現実の残酷な風景

を見ても心を動揺させない。グロテスクな夢想の高まりを除けば、彼らの生活は死の静謐さに包まれている。

既に述べたように下層の生活、アンダーグラウンドへの関心は、小説というジャンルにおいて常に存在してきたものだ。『最も低い飛行』は忌まわしい空間を描いた作品だが、しかし、それゆえに古典的な文学作品、たとえばドストエフスキイの系列に連なるとも言えるだろう。また、奇妙な固有名詞や隠語を多用することによって、新しい言語空間を作り出している点にも、文学的な価値を見出すことができるだろう。

麻薬への関心はド・クインシーの『阿片常用者の告白』、ハクスリー『知覚の扉』、あるいはバロズ『裸のランチ』やカスタネダなど、欧米の文学の中にしばしば見出すことができる。それらに見られる特徴として、たとえばド・クインシーやハクスリー、カスタネダの作品の場合、自らの人生を含めた告白への志向、知覚の拡張や意識の変化といった科学的関心を指摘することができる。それらは集団的なものと言うよりは、むしろ個人的意識を舞台としたものだ。また、『裸のランチ』には、麻薬常用者の生活を始めとする社会的要素への関心の他、麻薬による日常的な論理の破壊、それにもとづく実験的な言語使用といった文学的な関心を見出すことができる。

現代ロシアの文芸作品にも、そうした特徴は見出すことができる。たとえば、シリャーノフの『最も低い飛行』は、麻薬の特徴や麻薬常習者の生活を描き出そうとするものだし、そこには言語的な実験を見出すこともできる。ペッペルシテインとアヌフリエフの『カーストの神話生成的愛』は、日常の論理が通用しない幻覚の世界を描いている。『ドストエフスキイ・トリップ』の麻薬は、意識の下に潜むトラウマを暴き出すものだ。

とはいえ、現代ロシアの麻薬文学には、欧米の麻薬文学とは明らかに異なる特徴を指摘することができる。現代ロシアの麻薬文学は個人的意識以上に、社会や歴史を志向しているのだ。『ドストエフスキイ・トリップ』は文学という制度を、『ジェネレーション P』や『最も低い飛行』は現代ロシア社会を、『カーストの神話生成的愛』は第2次世界大戦の神話を問い直し、語り直そうとしている。これらの作品は麻薬を通して、社会に流通している公式的な言説を問い直し、パロディー化し、また私的な新しいイメージを付与することで再生させる。そこには社会を志向するというロシア文学の強固な伝統と、その伝統に対する問いかけを読み取ることができるだろう。

反社会的なものである麻薬が現代ロシア文学において表象される場合、それは公式的な言説と私的な言説の間の、正典と偽書の間、カルチャーとサブカルチャーの間の、揺らぐ境界の上に存在しているのだと言えないだろうか？麻薬は時代の病理の反映としてそこに存在しているだけでなく、価値観の揺らぐ時代に相応しい主題として存在している。